
思春期青年期の臨床・学校

塚本千秋著

金剛出版, A5判 280頁, 3,740円, 2025年5月刊

(劇作家・精神科医) **胡桃澤 伸**

精神療法の本を久しぶりに読んだ。

精神療法を学びたくて、精神科医になった最初の十数年は手当たり次第に読んでいたが、いつの頃からか最初のこの十数年間に読んだ本のなかで、また読みたいと思う本だけを繰り返し読むようになり、新しい著者と出会うことがほとんどなくなっていた。今回、塚本千秋さんのこの本を手にとったのは「な

かなかい本ですよ」と上手に薦めてくれる人がいたからだ。

精神療法について書かれた、本書の第一部を読むと、塚本さんがご自身の迷いや失敗を率直に言葉にしているのが分かる。臨床の現場で体験する、目を背けたいような自分の振る舞い、感情、思考を見つめることから学びが始まる。塚本さんはそこを避けて通らない。精神療法の本はこうでなければと思う。

本書を読んで、私が大変に引きつけられた箇所を二つご紹介したい。一つは「臨床の立ち居ふるまいについて (The moment we feel something evil)」で出会った「私は患者さんの言葉や態度から、ときにはかすかに、ときにははっきりと、“邪悪な”ものを感知します。最初は感知できなくても、努力すれば必ず感知でき、やがてその感覚は患者さんが患者さんとならざるを得なかった経緯の理解につながります。同時に私は自分が治療者として何かを言ったり、振る舞ったりする時にその背後に私自身の邪悪さを意識します」という文章だ。

塚本さんは御自身が年をとり、「患者さんの苦痛が軽くなればよいという当たり前の願いにつながりそのような言葉を探して使うようになりました」という臨床の内実を表すのにぴったりの言葉として、若い頃に読んだ北杜夫さんのエッセイにあった“ねーんげん的”という言葉思い出す。人間的を言い換えた言葉で、出典はトーマスマンの小説『魔の山』であると知った塚本さんは探索を続け、小説家の辻邦生さんがトーマスマンのこの言葉を、「戦争や血や破壊をすら要求する根源の要求としてのデモーニッシュな力」と結びつけて論じているところから、“邪悪 (something evil)”という言葉を見つけ出す。言葉を探しながら思索する塚本さんの立ち居ふるまいが気持ちいい。患者が患者にならざるを得ないのは、理性ではすくいきれない不合理な状況を生き延びるために“邪悪”に身を任せるしかないからであり、関わる治療者も自身の“邪悪”にこころを開いて初めて患者の“邪悪”と関わるができる。この後に続く症例報告は、患者の“邪悪”が姿を現し、それに塚本さんの“邪悪”が関わり、変転してゆくさまを、現場に居合わせているかのように味わえる。

もう一つは、「思春期患者と薬物処方」という論文にある、「バッテリーはストライクゾーンを、首からさげて歩いているわけじゃないよなあ」というつ

ぶやきに始まる文章だ。薬物療法とは何かがわずかな十数行に凝縮されている。医師にはもちろんだが、医師以外の方々にも、ぜひ読んで欲しい。
